

27) 新潟大学における生体部分肝移植この1年

山本 智・佐藤 好信
 中塚 英樹・西村 淳
 諸田 哲也・黒崎 功 (新潟大学)
 白井 良夫・畠山 勝義 (第一外科)

1999年3月から2000年3月までに10例の移植症例を経験したので報告する。平均年齢が54.5歳で、男性、女性ともに5例であった。疾患の内訳は、原発性胆汁性肝硬変が3例、C型肝硬変が3例、B型肝硬変が1例、アルコール性肝硬変が1例、亜急性劇症肝炎が2例、Bud-Chiari症候群が1例で、ウイルス性肝硬変のうち3例に肝癌合併を認めた。観察期間は短い現時点での生存率は80%で、感染症と脳出血にてそれぞれ1例ずつが亡くなられた。主な術後合併症としては、胆汁瘻2例、敗血症2例、脳出血1例、末梢血管炎1例、サイトメガロウイルス感染3例であった。免疫抑制剤は、FK 506とステロイドの2剤でおこなっているが、腎機能障害時にはアザチオプリンを併用している。

28) 腹壁消毒の cost-benefit の基礎検討

田宮 洋一 (県立吉田病院 外科)

腹壁の健常皮膚の消毒に際しては、Chlorhexidine gluconate (CHG), povidone-iodine (PI), 消毒用エタノールが単剤あるいは他剤との併用や混合剤として使用されている。

多くの施設で他剤に比べ高価格の PI に続いて消毒用エタノールと CHG の合剤を使用しているが、消毒スペクトルが広く、即効性に富むエタノールと PI や CHG を併用する臨床的意義がどの位あるのか疑問がある。

腹壁消毒の cost benefit を検討するために以下の基礎実験を行った。

男子医学生15名を5名づつ、PI の後に、0.5%CHG と消毒用エタノール合剤を使用するI群、0.5%CHG と消毒用エタノール合剤のみ使用するII群、消毒用エタノールのみ使用するIII群に分け、腹壁の細菌数を消毒後7時間まで測定した。

結果：消毒前に比べて、消毒後7時間まで各群とも低値を示し、消毒後の細菌数に各群で差を認めず、消毒用エタノールに、CHG, PI を併用する意義は確認できなかった。

29) 大腸内視鏡で粘液産生が確認された虫垂粘液嚢腫の一例

皆川 昌広・遠藤 和彦
 石川 裕之・木村 愛彦 (秋田組合病院 外科)
 伊達 和俊・小杉 伸一
 福田 二代 (同 内科)
 渡辺 正人 (同 臨床検査科)

症例は、65歳女性。夕食後より右下腹部痛および歩行時右下肢痛出現したため当院受診し、腹部超音波・CTにて約10cm 大の嚢腫状腫瘤を右下腹部に認めた。大腸内視鏡にて虫垂開口部より黄褐色の粘液流出が観察され、虫垂粘液嚢腫を疑われた。発症より5日目に当科転科となり、虫垂嚢腫および虫垂開口部を含めた、盲腸部分切除術を施行し、病理組織学的には、虫垂粘液嚢胞腺腫と診断された。虫垂粘液嚢腫は稀な疾患であり、今回我々は、大腸内視鏡で粘液産生が確認された虫垂粘液嚢腫の貴重な一例を経験したので、報告する。

30) Marlex mesh を用いた閉鎖孔ヘルニア手術法の検討

篠川 主・猪俣 英子
 大日方一夫・鰐淵 勉 (南部郷総合病院 外科)
 佐藤 巖

【目的】閉鎖孔ヘルニア手術での Marlex mesh を用いた修復術の意義を検討した。

【対象・方法】1979年1月1日～2000年3月31日に当科で経験した閉鎖孔ヘルニア22例を対象とし、手術成績や術中所見から mesh を用いた手術法の内容を分析した。

【結果】22例中20例に手術が行われた。閉鎖孔に対して無処置3例、腹膜の縫縮10例、Marlex mesh 修復術が7例だった。mesh は腹腔側から4例、腹膜前経路で3例用いたが、前者の1例が胃癌で再開腹時に高度の癒着を、後者の1例で術中ヘルニア嚢の確認と整復が可能だった。再発による再手術例はなかった。

【結語】腹膜前経路で mesh を用いた閉鎖孔ヘルニア修復術は、ヘルニア門の確実な閉鎖、腸管との癒着防止、ヘルニア嚢の処置に有効である。